令和４年度　第３回名取市地域学校協働活動運営委員会概要記録

○日時	令和５年２月 21 日（火）午後２時より
○場所	市教委　第４会議室
○出席者（7 名）	八森伸委員、齋藤勇介委員、橋浦ふさ江委員、佐々木健太郎委員、伊藤宗男委員、小沢静子委員、高橋千春委員
○欠席者（2 名）	半澤新一委員、洞口のり子委員
○事務局出席者	教育委員会　教 育 長　瀧澤信雄 教育部長　菊池　博幸 生涯学習課　課　　長　佐藤　徹也 〃　課長補佐　佐藤　浩 〃　生涯学習・青少年係長　菊地　栄一 〃　〃　社会教育主事　小池　郁江
○傍聴人	なし

会　議　概　要

１　開　　会　　進行：佐藤補佐　　14：00～

２　あいさつ

瀧澤教育長

委員のみなさまにはお集まりいただき感謝申し上げる。地域学校協働活動を取り組んで４年目になる。年度初めから全ての本部が活動できたのは今年が初めて。各本部の工夫した取組に感謝。今年度地域、学校、子どもたちが一緒になって地域に関わる活動がいくつか見られとてもよい。増田中学校では「地域を知る学習」という取組を本部が中心となって行った。中学１年生の各クラスに教育委員会の職員と市議会議員を招いて子どもたちが疑問をぶつけて話合いをした。下増田小学校では、枝豆収穫のイベントなど地域の方と一緒に行った。ほかの本部でも地域に関わる活動や地域について考える活動があった。また、今年度、多くの地区で公民館との関わり、その中で取り組んだ活動がたくさんあった。今日は閖上小中学校の八森校長先生がいらしているが、地域学校協働活動のみならず、公民館との共有の講座があって大変助かったと聞いている。こういった取り組みが来年度以降も継続していければ、あるいは発展させていければと思う。今年度第一中学校の LGBT を学ぶ親学という講座を聞いて自分の認識が浅かったと強く感じた。講師が強調していたのが多様性ということ。15 の本部で共通する土台はあるが、それぞれの地区の特性を活かして多様な活動に取り組んでよいと感じる。横の情報共有などをしながら取り組んでいく必要がある。委員のみなさまには、忌憚のないご意見を出していただき、教育委員会でも考えていきたいと思う。

伊藤委員長

コロナの感染状況が落ち着きつつあると思う。なとり広報に地域学校協働活動の紹介があった。市民に周知していただきありがたいと思う。教育長より、公民館との連携を肯定的に捉えていただき、昨年からも進歩していると思う。12 月に地域を支えるトーク会があった。その時の講師と閑上公民館で地域力向上講座をしていた講師が、名取の支え合う活動は県下でも指折りの素晴らしいところだと話していた。その話を聞き良い方向へ向かっていると思った。これからもさらに進歩するよう、コーディネーターも地域の本部長も続けてやっていこうと思える評価の仕方をして終わりたいと思う。たくさんのご意見ご感想をいただければと思う。

会議の成立確認

名取市地域学校運営委員会設置要綱第 6 条第 2 項により、委員過半数の出席を確認し、会議成立を宣言した。

会議公開の確認

名取市審議会等の会議の公開に関する要綱第 2 条の規定により、公開の対象となる旨告げる。

傍聴席を設けていたが、本日の傍聴者はなし。会議録を作成後、皆様に確認いただく。

非公開の議事は予定していないが、非開示情報が含まれる内容となった場合、会議に諮り決定していくことを告げた。

会議録は非開示情報を除き、一定の期間公開。姿勢情報コーナーにおいて、翌年度の 4 月 1 日から 3 年間。ホームページでは、掲載から 1 年。

３　協議

名取市地域学校協働活動運営委員会設置要綱第 6 条第 1 項により、伊藤委員長が議長となり進行する。

伊藤委員長

（1）各学校区の状況について事務局からの報告願います。

事務局（小池社会教育主事）

事業内容の文書と資料②の文書を合わせて、実践事例集を作成する予定。他の学校区の取り組みを次年度の参考にできるよう、今年度中に作成して、全コーディネーター、学校、公民館に配布したい。また、来年度の早い段階でこの事例集を活用しながら、取り組みの紹介をしあえる機会を設けていきたい。特に総合的な学習の時間の中に地域のことを学ぶ学習を位置づけ、協働本部と連携した授業が増えてきている。学校の教育

課程の中に位置づけられることで無理なく学校との連携が進んでいる。

伊藤委員長

事務局から報告に感想や質問がありましたらお願いします。

引き続き、（２）今年度の振り返りについての評価・検証、アの協働本部、学校から寄せられた今年度の活動について事務局からの報告をお願いする。

事務局（小池社会教育主事）

学校、本部、公民館それぞれに依頼した「振り返りシート」の記述について、要約しながら成果と課題を説明した。

伊藤委員長

意見や質問を一人ずついただきたい。

橋浦委員

どの本部に対しても公民館の支えがある。私の管轄の閑上も公民館のアドバイスで元々いた住民と新しく入ってきた住民との連携ができている。地区ごとに素晴らしい取り組みをしている。

齋藤委員

膨大な資料のまとめをしていただきありがたい。今年度の成果というのが目に見えてわかるものになっている。年を追うごとに調査結果を見ても、成果の中身を見ても、毎年ブラッシュアップされている。当初は手探り状態の中の活動から、地域とのつながりが深まり連携が進み、活動の幅も広がってきている。集まった調査結果をもとにまた来年度の活動に活かせる。資料からどのポイントが地域活動の中でニーズがあるか読み取ることができる。地域が入ることによって学んだことを活かせる地域の場ができる。その中で教育的な生徒指導ではない心を育む活動につながるとよい。

八森委員

本校では、正直こんなに成果が上がると思っていなかった。今回地域の協働本部ができて、コーディネーターが週１回来校し、公民館の協力があり、地域学習がだいぶ整理出来た。何よりも、実際に学校に関わる、関わろうとしてくれる地域の方がたくさんいると感じた。今まで整理されずにいて、どこかが音頭をとってくれるのを待っていたようなところがあった。今回本部ができたことによって、地域学習がスムーズにできるようになった。地域学校協働活動というのは学校への支援だけでなく、学校が地域のためにしていかなくてはならない。コロナで落ち着かないと難しいが、地域の活動に子ども

たちがボランティアとして入っていけるとよい。質問だが、７ページ④の地域学校協働活動の理解や推進について、調査の対象は誰か。

事務局（小池社会教育主事）

この調査は、学校の担当者に回答していただいた。学校の中、教職員の先生方の理解はいかがかという内容である。

八森委員

これを見て少し残念に思った。こういう活動について先生方がわかるような仕組みを作らないといけない。地域の方々に支えられているということを先生方にも伝えていかなければ。

髙橋委員

当初よりはるかに地域と学校が連携している。それぞれの立場にアンケートを実施したのが良い。５ページの社会に開かれた教育課程の具現化とはどういうイメージか。

事務局（小池社会教育主事）

これまで数年間同じ調査をしている。文部科学省や学校では地域や社会と連携しながら子どもたちに社会とつながって、子どもたち自身の幸福な人生を作っていってほしい、力をつけてほしいと願って学校教育をしている。そういった力をつけるためには、どの学年でどんなふうにどんな教科でつけさせるのか計画している。それを地域の方に知っていただき一緒に活動していただくことで、お互いのニーズが一致しながら活動が広がっていく。その計画や思いが地域に広がっているかという調査である。

小沢委員

学校からボランティアの声をかけてもらう。他の方からボランティアは難しいという声がある。うまく進んでいくと新たな課題が出てくるが、一つひとつクリアしていければよい。５ページの子どもの安全確保で、地域の方と子どもたちとのつながりが出てきていると感じた。

佐々木委員

連携が図られ、幅広い取組が見られる成果として表れている。この手ごたえを本部に実感してもらうことが大切。表の並べ方によって分かることもあるので、本部の設置年数などで並べ替え分析してはどうか。コミュニティスクールの調査でも、設置年数が長くなるにつれ成果・効果が表れてくることが分かっている。最初は理解する、次に連携、最後に活性化するという流れになっている。現在、成果効果が感じられない本部も、その流れが

見えれば安心できるのではないか。

高橋委員

横軸も並べ替えたほうが良いのか。

佐々木委員

そのとおりである。

事務局（小池社会教育主事）

経験年数以外にも学校の規模もあるので一概には言えないところもある。

瀧澤教育長

社会に開かれた教育課程は難しい言葉。イメージ自体が掴みにくいのではないか。具体的に開かれた教育課程とは何か注釈をつけるなどの説明があればもっとよい評価になったのではないか。また、生徒指導に関する項目についても、積極的な生徒指導という意味では協働活動は大きな役割を果たしている。生徒指導を何か起こってからの対処ととらえるのではなく積極的な生徒指導も含まれるということを説明する必要がある。

伊藤委員

どうしても空欄が気になるが、効果成果はこれから伸びてくる、見えないところもある。西小と二中の活動に参加してみて、本部が楽しそうに活動している。やりがいを感じていると思う。

伊藤委員

その他、無ければ続いて（２）⑤の説明を事務局願います。

事務局（小池社会教育主事）

児童数とコーディネートの負担感の関係について、調査結果を説明した。謝金の傾斜配分を要望する本部もあるが、規模の大きい学校でも、負担の有無に関する意見には違いがある。児童数よりも活動内容やボランティア募集の仕組みが負担と感じる原因ではないかという意見もある。そのような理由で傾斜配分は今のところ考えていないことを説明した。

伊藤委員

このことについて皆さんから何かないか。無いようなら続いて、（２）イ公民館の振り返りについて説明願う。

事務局（小池社会教育主事）

公民館が記入した「振り返りシート」①強みが生かせているか、②反対に公民館の運営に何か影響があるかについて要約しながら説明した。

齋藤委員

②の公民館への影響について今後この成果が見えてくると思われる。公民館は高齢者向けの取組や意識が強い。協働活動を通して子供たちに目が向くようになってきている。公民館が子供たちの意見をどう取り入れるか積極的な姿勢が必要。公民館運営へ良い影響を大いに感じると回答した意見を他の公民館にも具体的に伝えていくことで、あまり影響がないという公民館も変化していく。ぜひ今回の結果を公民館に戻してほしい。

佐々木委員

公民館のターゲットの転換が必要。多世代交流が広がっている。ターゲットによって刺さる方向が違う。PTA、子育て世代にささる方法を検討していく必要がある。例えばオンラインの活用、講座のオンデマンド配信など。仕掛けを相手によって変えていくとさらに良い。

伊藤委員

その他意見はないか。

なければ、（２）ウ・エ自由記述・まとめについて事務局、説明願います。

事務局（小池社会教育主事）

その他の自由記述では研修会や情報交換会に対する要望、持続可能な活動に向けてコーディネーターや本部の世代交代がしやすい体制づくりへの懸念が出されていることを紹介しまとめとして次年度に向け、以下の 3 点を説明した。

①今後も公民館との連携を進めていきたい。公民館も協働活動の良さや効果を運営に生かしながら、本部の自立的な運営や活動を支援、サポートできるようにしていきたい。

②研修会や情報交換会の日程や内容は、なるべく本部や学校の要望に沿うように検討していきたい。日程については、校長会や教頭会でも説明し、先生方にも出席してもらえる時間帯で工夫したい。

③持続可能な活動に向け、コーディネーターの負担を軽減できるよう努める。地域住民に協働活動が浸透していないため、コーディネーターが仕事をしづらいといった声も聴かれる。次年度は加えて市のインスタグラムやためマップの活用など検討し、コーディネーターが地域で活動しやすい環境を作っていきたい。

伊藤委員

一年間の活動や次年度に向けて、意見を頂戴したい。

高橋委員

一つ一つ着実に実施していけばさらに良くなる。さらに取り組んでほしい。

小沢委員

こういう活動に参加なさっているのはどんな年代の方か。

事務局（小池社会教育主事）

年配の方が多い。元 PTA のかたも多い。

佐々木委員

成果の可視化が大切。エコマップを作るのも効果的。どういった連携先があるのか可視化すると手ごたえにつながる。他の地域で見合うと他地区との広がりにもつながる

コミュニティスクールとの関係はどうなっているのか。流れ的には先に地域学校協働活動があってその後コミュニティスクールがあるとやりやすいのではないか。

共生社会の形成（障碍者の生涯学習）について、公民館の受け皿等はどうなっているのか。合理的配慮は地域の中でなされているのか。長い目で見ると大切だと思う。

教育長

名取市ではコミュニティスクールを R6 年度からモデル的に導入していこうかと考えている。せっかく地域学校協働活動が進んできているので、コミュニティスクールが入ってくることがプラスになるか精査する必要はある。

名取市には 100 人以上の特別支援学級の子がいる。発達支援の子もいる。名取支援学校もある。不二が丘小学校にも支援学校名取校がある。障害がある子も健常な子も一緒に学び交流していくことは大切。地域の中、公民館の中で行うことについては課題がある。考え方としてはおさえていかなくてはならない。貴重なご意見感謝する。

橋浦委員

各学校でしていることが参考になると思う。他の学校の取り組みが活動の広がりにつながる。市内の学校、本部が同じことをしていくのではないが、他の取組が手掛かりとなる。お互い連携して情報交換していければよい。ボランティアの高齢化もあるが、少しずつ PTA の参加も見られるとある。急には無理だが少しずつすそ野が広がっていけばよいと考える。

齋藤委員

可視化は大切。全体の記述に情報交換会、連絡会をしてほしいという意見がある。それは活動に迷いや不安感がある表れ。迷いや成果も見えてきて次年度にうちでも取り入れようとなると負担感の軽減につながる。本部の世代交代、次々につないで行けるような視点を育むことがそれぞれの本部に必要。負担感ではなく子供たちの必要な経験にかかわれるというやりがいや、自分たちのためになるという経験を持つと継続につながる。やりがいを持てるように、取り組みの持ち方に工夫をしてほしい。

八森委員

コーディネーターの謝金の傾斜配分ということを考えていたということか。

事務局（小池社会教育主事）

考えていたというよりはどんな感じなのかという意見を聞いてみた。

教育長

子供数の多い本部のコーディネーターやかかわっている方から、ご意見があった。児童数が多いと負担が大きくなる活動があるかもしれないが、反対に児童数の少ない学校も課題があるかもしれない。一概に言い切れないのではないかという話になった。今後実際にかかわっている人に話を聞く必要がある。

八森委員

コーディネーターを二人にしようかと思っている。謝金が減ってもいいという意見である。大きい学校でコーディネーターが複数いるところもある。そのあたりは考える必要もあるとは思うが、傾斜配分になると、小さい学校の配分が少なくなるのが心配である。活動が活発になればお金もかかる。

教育長

補助金は減額されている。学校規模による傾斜配分は今後の議論は必要だが、活動が活発になれば経費が必要になる。事務局が考えていかねばならない課題である。

八森委員

活動がスムーズに進み始めてよいと思う。心配なのは協働本部の活動が持続的に進んでいけるのかということ。協働本部は新しい仕組みなので勢いややる気があり進んできた。これから気を付けなくてはいけないのは、あいまいになったり、減速したりすること。コーディネーターの世代交代も視野に入れた活動も大切である。学校の教員は移動があ

るので持続可能なやり方が作られていくとよい。現場でも考えていきたい。

伊藤委員

公民館との連携が進んでいるが、全て公民館にやらせればいいというのではない。公民館の機能と、協働活動のねらいをきちんと押さえておくことが大切。知人が本部の役員と別の本部のコーディネーターをしている。その知人と同じ活動をする中で、その人に自分の知らない力があるのを初めて知った。また、その人を見て学ぶことが多い。そのように協働本部の中で、自分の可能性を知ったり、新しい学びを得たり、互いに認め合うことができれば持続可能な活動になるのではないか。次年度も楽しい活動が展開されるとよい。

伊藤委員

協議は全て終わる。事務局にお返しする。

事務局（小池社会教育主事）

今年度の運営委員会は本日で終了となる。1 期 2 年の任命期間ということで一区切り。様々な視点からご意見、ご提言いただき、感謝申し上げる。新年度、各団体の代表の方に改めて運営委員の候補者を推薦していただく。よろしくお願いしたい。

（議事一切を終了。）

4　閉会

15：20 終了

以上